

Robert Gibbs and Elliot R. Wolfson ed. *Suffering Religion*  
London, New York: Routledge, 2002, vii+192pp, \$37.95(pbk)

志田 雅宏

本書は、現代における苦難の諸問題に対して宗教学がいかなる応答を果たすことができるか、ということについて、2人の編集者をはじめとする6人の研究者の議論を載せた論文集である。論者の顔ぶれを見てみると、R. GibbsとS. Kepnesの2人はユダヤ哲学の分野から、E. R. Wolfsonはユダヤ神秘主義の観点から、いずれも「テキスト」という大きな主題を意識して議論を行っている。また、C. M. KearnsはJ. クリステヴァの『恐怖の権力』を中心に、キリスト教の事例を交えて議論し、ニューエイジや世俗社会の文脈で考察をしているP. E. KlassenとG. Wardの議論の背景にもキリスト教がある。全体を通じて「God」という表現が一貫して用いられており、本書における「宗教」という言葉は一神教、さらに特定すればユダヤ教とキリスト教の思想や社会、文化的背景を想定しているといえる。

まず、本書を読むにあたり、評者の問題関心に即して2つの論点を提示しておく。ひとつはショアー（ホロコースト）の問題である。N. de Langeが論じているように、現代のユダヤ教にとって、その衝撃は苦難に対する従来の解釈を拒んでしまうほどの未曾有の大きさであったといわれる。応答を求められたユダヤ教は統一的な見解を出すには至らず、諸派の間で受け止め方に差異が生じ、ホロコースト後の神学があらためて要請される必要性を挙げる声もある。ユダヤ教とのかかわりで論じている3人の論者は、その問題を哲学・聖書解釈・神秘主義の視点からそれぞれ考察しているが、その試みもまたユダヤ教における諸動向のうちにあるものとして読まれるべきなのかもしれない。

もうひとつは終章に示されている「宗教の苦難 the suffering of religion」の問題である。現代の衝撃的な苦難に対して宗教は応答ができるのかという疑いや、世俗化・自然科学の進歩によって宗教の領域から何かが奪われていくという指摘は、現代の宗教の役割を考える上で避けては通れないものだろう。宗教自身がその内部に持つこの傷つきやすさを、本書では「神自身において神が苦しむ God suffers in God's self」という視点から論じようとしている。それは、本書で行われている議論が神学的なそれとどう違うのかという、本書の全体的な位置づけという問題とも関わってくる。

これらの論点を踏まえつつ、次に各論文の要点をまとめる。

1. “Unjustifiable suffering” (Gibbs) では、近現代のユダヤ系哲学者、H. コーエン、F. ローゼンツヴァイク、E. レヴィナスのテキストを注解する形で、苦難の哲学的正当化を批判し、同じ哲学という舞台で苦難者を守る立場を示そうという試みが展開されている。そのテキスト注解という形式は、ユダヤ教の伝統である聖書注解やタルムードを連想させる傍ら、現代のユダヤ教研究においてP. OchsやE. R. Wolfsonなどにより提唱されている「テキストの苦難」、つまりいか

にしてテキストを解釈すべきかを模索する試みをも背景としている。論者は3人の著作を順次部分的に抜き出して、前半部では主に彼らの西洋哲学の伝統に対する批判的な見解、苦難の特定をまとめ、後半部に入ってその応答を導出しようとする。苦難の特定で目を引くのは、隣人に対する責任においてレヴィナスが主張する「神の不在」に明らかなように、それを人と人との関係においてとらえようとする点である。社会における人間同士の関係から「貧困」を苦難としたコーエンは、それが要求する「憐れみ」が、相違を超えた co-human なる関係の構築によって初めて生じてくると結論付けている。また、苦難に神の意志を付与する神義論を批判するレヴィナスは、神と人の関係で苦難を説明しようとする試み自体を根本的に見直そうとしている。そして、ローゼンツヴァイクやレヴィナスが哲学による苦難の正当化を批判するとき、その根拠を「全体化の思考」による個人、あるいは他者の消失という問題に置いている点も見過ごしてはなるまい。政治の文脈で使われる totalitarianism とは「全体主義」を指し、現代のユダヤ教においてそれが特別な意味を持つことは言うまでもない。2人はともに「苦難をいかにして語るか」という問題関心から苦難（の内在化）による救済の方法へ向かっていく。レヴィナスはそれを saying/dire, 「私」が「語る」そのものになる関係に見出し、またローゼンツヴァイクは語る主体を芸術に特定して、苦難を解決しようとするのではなく、その苦しみを記憶し、共有することで、苦難者は慰められるべきであると主張したのであった。

2. “Regarding Job as textual theodicy” (Kepnes) では、現代のユダヤ教における最も重要な問題として「無垢な者の苦難」が挙げられ、M. ブーバーの解釈を踏まえたヨブ記の現代的な読みが展開されている。ホロコースト後の動向のひとつとして、R. ルーベンステインの「神の死の神学」運動や、プロテスタント神学の立場からカトリック神学を批判する P. K. ロスの「抗議の神義論」など、従来の神義論への批判がユダヤ・キリスト両宗教において見られる。だが、これらの試みに対して、良き神／悪い人間、悪い神／良き人間、神義論／反・神義論という西洋論理学の二項対立を抜け出していないのではないかと、前章のレヴィナスのそれにも通ずる指摘を論者は示す。そして苦難への応答の可能性を聖書解釈に求めるのである。論者はヨブ記の特徴を multi-genre text と表現しているが、この表現は聖典とは時代や地域といった特定の背景によってさまざまに読まれるものであること、そしてヨブ記が持つ文学的な豊かさに起因するのではないかと評者には思われる。そして、従来の解釈ではヨブに対置され、罪びとの典型とされてきた友人たちの立場をユダヤ教のファンダメンタルな立場として読んだり、妻の立場をニヒリズムに置き換えたりと、価値判断を宙吊りにしつつ、現代の動向をテキストに読み込むことで多様な解釈を引き出そうとしているのである。論者は妻、友人たち、ヨブ自身、神と4つのアプローチを紹介した上で、神によってヨブが新しい家族を得た終幕のエピソードに注目する。ここには、神がヨブに対して与えた、最終的ではないひとつの現実的な答えが示されているというのである。ショアーを生き残った世代、神によってヨブが新たに得た家族には、受動的に選ばれるのではなく、能動的に主を選ぶことが求められると論者はいう。神の正義・救済をもたらすのは、アクティブな神の代理人として、能動的な選びをした戦後の世代の役目であり、そこに新しい出発へ向けての責任と挑戦があるのだ、と。

3. “Suffering in theory” (Kearns) では苦難はいかにして語られるべきかという主題について、クリステヴァの「abjection (棄却, おぞましいもの)」という概念に即して論じられている。詳

述は省くが、この「アブジェクション」とは汚物への嫌悪感や吐き気、病気や外的な損傷による身体的・精神的な崩壊、さらには家族の分裂や戦争による社会全体の解体などにより、恐怖症、精神病を患っている状態と考えてよい。嘔吐という行為に典型的に見られるように、それは自己を何らかの形で外に投げ出して傷つけること、あるいは得体の知れないおぞましさに恐怖し、自分が何か苦しみを背負っていると感じたり、実際に身体的・精神的に苦しんだりすることである。クリステヴァはおぞましさに傷ついたこの状況、またおぞましさを浄化する試みのひとつとして宗教を挙げ、西洋宗教史上におけるアブジェクションへの対応の議論から、2つの特徴を取り出している。ひとつは「死すべきもの」という認識、もうひとつは「有効な語り」である。評者の印象では、クリステヴァは個別性の消失という Gibbs と同じ問題に対して、言語を象徴レベルから原記号 *semiotic* レベルへ移行させて考察しようとする点で、ローゼンツヴァイクの見解と重なる部分が多いように思われる。1章で論じられているように、ローゼンツヴァイクは人間の苦難を死の恐怖と特定し、言語化以前の「叫び」によって表されると考察しているからである。その一方でローゼンツヴァイクが、この苦難の救済がユダヤ教において民族に広がっていく、というところに宗教の役割を見出したのに対して、論者は、クリステヴァがレトリックの持つパワーに着目し、宗教を限界の認識、またアブジェクションと苦痛に対する共同体の心理的な支えの様式を生み出す文化的理論・実践としてとらえている、と主張している。死というすべての生に共通の限界・苦痛と、苦難の只中において個人を固有の存在として位置づける語りによって、エートスとパトスが人に苦難と団結するための力あるいは快楽 *jouissance* を与えるというのである。その中でさらに論者はキリスト教に関する事例から、苦難の只中で苦難を語ることによる「苦難者」の正当化がそこにあると指摘し、さらに理論によって喪失したエートスとパトスを取り戻す試みとして、聖母信仰についての理論と詩を並置した *Stabat Mater* を挙げている。そこで、十字架がイエスを越えて信者にも癒しを与えるように、言語がその表出した語句を越えてアブジェクトな者の中に入り込んでいくこと、そうして理論が苦しむ人々の支えになる可能性を見出そうとしている点に着目しているのである。

4. “The scandal of pain in childbirth” (Klassen) では、合衆国北東部に住むヨーロッパ系の中産階級を中心に、自宅で麻酔を用いずに出産することを選択する女性へのインタビューをもとに考察がまとめられている。調査を受けた女性とその家族はユダヤ教、キリスト教、あるいは新宗教のさまざまな宗派に属しており、自宅出産を選ぶ女性がしばしば戻っていく宗教的な本源において、何を感じ、何を信じているか、その内実を明らかにしようという試みである。彼女たちがそうした出産方法を選ぶ主な理由としては、子供を麻酔薬の影響から解放したいということの他に、出産時の痛みを経験したいということと、出産に立ち会う周囲の人々とのつながりを感じたいということが挙げられており、そこに各人の宗教的な背景が絡んでくると論者は考えている。そもそも出産とキリスト教とは近現代において切り離されたものではなかった。というのは、19世紀には出産が女性の苦難として聖書が命令するもの、すなわち宗教的に深い意味を付与されており、それが20世紀後半において、代理出産などの言説でふたたび浮上してきて、「苦難の生産性」が言われてきたからである。彼女たちの中には出産のとき、十字架のイエスを思い描いたり、苦難の僕についてのイザヤ書の一節を朗読したりと、自発的に宗教的な実践を行っている者が少なくない。また、出産の過程で体験した事柄を自分の宗教的な背景にあわせて語るケースもある。

また論者は、それぞれの宗教的な背景が個人に与える作用とは別に、同じ宗教を信仰したり実践したりするところで、自宅での出産を選ぶ女性たちがお互いに団結していると感じている点も特徴的であると述べている。ここで言う苦難、つまり出産における痛みは「生産性」という点で、他章で特定される苦難とは性質を異にしているが、むしろここで注目すべきはその痛みに耐える助けとして宗教伝統が果たす役割である。それについてはまた本評の後半部で言及することにしよう。

5. “Divine suffering and the hermeneutics of reading” (Wolfson) では苦しむ神について、ユダヤ神秘主義の観点から論じられている。離散したユダヤ人にとって、人間と苦難を共有する形での神の苦しみは「シェキナーの離散」という概念として、その信仰を支える役割を果たしてきた。論者は、苦しむ神という教えに対してはラビたちの中で神学的な問題性が指摘されてきたことを踏まえつつ、16世紀のイサーク・ルリアのカバラー概念を主に用いて、神自身のうちでの神の苦しみについて考察を行っている。その教義についての詳述は省くが、このカバラーの性質について、論者が強調しているのは無限なる「エイン・ソフ」から10の「セフィロート」が流出するとき、無限が有限によって表象されているという両者のアンビヴァレントな関係性である。創造における光の流出もまた、この無限—有限の関係をイメージさせる。光は無限の闇に境界を作り、いわば無限の力を隠すということになるからである。ここでの「隠す」とは「顕現する」を前提にしている。地上的な現れ、つまり表面的には有限⇄無限でも、本質は無限⇄有限なのだから、有限なもので無限を覆う（表象する）ことは不可能である。こうした神の自己矛盾の一例が、原初の創造において「収縮 zimzum」、神が自分自身の中に縮みこんでいくという行為によって生じる、創造における神自身のうちの最初の苦難である。そして、こうした分裂と矛盾が原初に起こるところから、今度は救済に向かってそれらが再結集していく流れが生じてくる。「器の破壊」を経て「修復 tiqqun」に至る中で、神の裁きと慈悲に対応するそれぞれ女性（的な力）、男性（的な力）も統一されていくことになるが、ここで論者が重視しているのは、両者が対等な関係性としてではなく、むしろ前者が後者に回収される形で統一されていくという点である。ルリア派にとってこの創造の概念とは、「書く」という行為を無限における境界の設定と同定させるものであり、それはファルス的な行為であったと論者は言う。彼らにとって書くという行為は有限なものの中に、無限なる神を隠す（顕現する）こと、「神のテキスト化」を目的とし、スペイン追放という現実の苦難をテキストの中に読み込もうとする営みでもあった。テキストは常に苦難のために開かれ、何度も解釈されなおすのである。また、それをファルス的と言うのは、M.A.Ouakninの言う「テキストの割礼」と関連する。割礼とは他から区分する決定・限定に他ならず、ひとつひとつの解釈による特定の読みの方を連想させる。こうして、ユダヤ教の儀礼行為が書くあるいは読むという行為と結びつき、またその行為が神の創造における原初の苦難、神自身のうちにおける神の苦しみに加わるという意味を持つことになる。

6. “Suffering and incarnation” (Ward) では苦痛と快楽の関係について、現代の世俗社会とキリスト教ではどのように異なっているのか、という問題に焦点が当てられている。まずは、世俗社会の「欲望のエコノミー」だが、論者は資本主義を想定しながら、ラカンの理論に基づいてその根底に供犠の論理を見る。そこでは人が最も望むものを否定させられ、欲望の対象への終わることのない幻想に支配される。供犠では最も価値あるものが死を与えられる。それによって「XなきX」という論理が成立し、すでにないもの（無、ケノーシス）をあたかもあるかのごとく欲望

することを可能にする、というのである。一方、キリスト教の「救済のエコノミー」では、犠牲としての苦難と罪の結果としての苦難とが区別され、十字架による犠牲の予告によって、前者の苦難が栄光にもなり、そこにパラドキシカルな性質が生じるという。キリストのまねびによってその苦しみの残りを満たし、苦しみを快楽に変えようという姿勢は Kearns の議論にも通じるが、さらに論者は前章 (Wolfson) で示されたような神自身のうちにおける神の苦難として、「子」の受難を 3 つのペルソナの間の差異、緊張関係によって説明している。そしてこの原初の苦難は、愛のコミュニオン、愛することと愛されることの苦難であるという。愛する感情のさきにある物への欲望に支配された世俗社会の (供儀の) エコノミーに対し、キリスト教のそれが愛を行為することを求める点に、論者は両者の体系の違いを見出そうとしている。それは両者をサド・マゾ的な欲望論によって同一視しようとする見解に対して反発しながら、キリスト教の救済が現代社会に保持される意義を模索するひとつの試みともとれるだろう。

各論文の内容をふまえた上で、評者が感じた印象から、最初に挙げた 2 つの論点についての簡単な考察を述べておく。

まず全体の印象として、6 人の論者はそれぞれの専門や問題関心に即して独立した論文を掲載しているが、それぞれが苦難の特定から宗教的な応答の模索へと進む手順を意識しており、ひとつのテーマについての一連の議論としても読める。さらに、本書で用いられている「宗教」という言葉についても、すでに示した「God」という一貫した表現だけでなく、緩やかな共通理解があるような印象を受ける。そのひとつは「共同性」である。Wolfson はそれを神と人との共同体という意味で用いているが、全体的にそれよりも顕著なのは「人と人との共同体」、また苦難は共有されることによって応答を与えられるという見解に基づいた、「共有する」という機能への着目である。そして、もうひとつは「言語」である。言語の性質に着目するアプローチもあれば、「読む・書く」などテキストへの関わりに着目するアプローチも見られるが、総じて宗教をなんらか言語的な視点でとらえる姿勢が顕著に見られる。もちろんその共通理解も、宗教をこうした要素に還元しようというのではなく、広めに枠組みを設定しておくことでアプローチの多様性を保持する、という本書の構想を反映している。それは、つまるところ、本書も多様な議論から多様な解釈を引き出すことを許す、ひとつの開かれたテキストだということなのだろう。

現代の宗教が直面した最も深刻な問題のひとつであるショアーについて、ユダヤ教の中でさまざまな見解の対立があることはすでに述べた。その問題を本書では哲学や神秘主義という知的な系譜に基づいて考察しているが、3 人の論者にいずれも共通するのは、「いかにして読み、いかにして書くか」を模索していることだろう。Wolfson はユダヤ神秘主義の伝統についての考察から、そうした模索の重要性が意識されてきたということを言及するにとどまっているが、Gibbs と Kepnes はそれぞれ現代における実例を挙げている。ヨブ記の詩の部分、つまり神との出会いから敬虔な信仰を取り戻していくヨブの内面の転回は、信仰のあり方の理想像として伝統的に重視されてきたが、ヨブが新たな家族を得て再出発するエピローグへの関心はこれまで決して高いとはいえなかった。そこに、苦難を生き残った人が新たな世代の人々とともに未来へ向かっていくという決定的な方向転換を読み取る Kepnes の指摘は現代的な聖書解釈の試みとして位置づけられよう。それはヨブ記の情景を自伝小説に書き込んだり、ヨブを主人公にした物語を書く E. ヴィーゼルの作品群をも連想させる。また、ローゼンツヴァイクの議論で思い浮かぶのは、C. ラ

ンズマンの『ショアー』やD.ラカプラの「徹底操作」の概念が投げかける苦難と表象の関係性への問いである。それはT.アドルノの「アウシュヴィッツ以降、詩を書くことは野蛮である」という表明に端を発し、「歴史における真実とは何か」という記述の問題と結びついて、戦後の歴史学に議論を持ち込んでいる。「芸術は苦難を解決するのではなく、苦難者を慰め、その苦しみを共有する」というローゼンツヴァイクの主張を現代の文脈で改めて見るとき、そこに表象における真実性という問題が浮上してくる。それは「何を書く（表す）べきか」というひとつの責任論・倫理として、この「いかにして書くか」という模索全体に深く関わってくるものといえよう。

「宗教の苦難」という問題については、それぞれの宗教と宗教学との関係性の違いが垣間見えるという印象を受けた。KlassenやWardの議論における対立の図式は「宗教と世俗化・自然科学」であり、ひとつの宗教の内部における問題というよりは、宗教全体が抱える性質のものといえよう。Klassenの「出産」において重要なことは、麻酔という現代の科学によって、そこに付与されていた宗教的な意味合いが奪われた（宗教固有の領域が奪われた）という点にある。自宅での出産を選ぶ人々が必ずしもこのことを意識していたわけではないが、宗教を通じて痛みに耐えることにより、結果的に喪失した宗教的な意味合いが生命を取り戻すことになるのである。Wardの議論では、宗教と世俗社会の相似的な部分を「エコノミー」としてとらえている。例えば、G.バタイユが「供儀とは殺すことではなく、放棄し、贈与することである」というとき、それは聖なるものがエコノミー体系をその内部に根本的に成立させていることを意味している。エコノミーのうちに宗教的なものが生成してくるという過程を認めながらも、その上で供儀とキリストの十字架との連続性を批判し、むしろ十字架こそが供儀宗教への批判であるという見解もある（R.ジラルド）。論者はキリスト教の「愛」の概念から、2つのエコノミーが似て非なるものであると結論付けている。2人とも確かにその問題関心はキリスト教に即してはいるが、より正しくはキリスト教というフィルターを通して、宗教全体と現代社会の関係性に着目しているというべきだろう。一方、ユダヤ教と関わる3つの論文では、いずれもショアーという固有の問題への応答がたえず念頭に置かれている印象を受ける。「宗教の苦難」をほぼ「神の苦難」と読みかえ、ユダヤ教においていかなる応答が可能か、という視点に立っている。それゆえ彼らの議論はショアーに対するそれぞれの解釈、主観的な応答として読めるのではないか。Gibbsが論中でも表明しているが、思想の系譜に依拠して先賢たちの意見を注釈し、それについての議論を行うという形式自体がまさにユダヤ教の伝統的な思考方法である。ユダヤ教は最近にいたるまで、「宗教」という言葉を知らずに来たといわれるが、3人の論者の立つ視点、思考方法は、キリスト教の枠組みを背景に持つ「神学」と「宗教学」という構造にはめ込まれていないという印象を受ける。その違いが、それぞれの宗教において論者が受け止める苦難の違いによるものなのか、あるいはそれぞれの伝統的な思考の枠組みの違いによるものなのか、ここで早急な結論を出すわけにはいかない。しかし、それでも「宗教学」の抱えている概念や他の学問領域との境界について考える上で、本書があるひとつの示唆を投げかけているといえるのではないだろうか。